

早期社会化：生物学的ニーズとコンパニオン（生活伴侶）動物としての鍵

S.G.フリードマン, Ph.D / ボビー・ブリンカー オハイオ州

翻訳 石綿美香

心理学の幕開け以来、継続的にかつ広く興味の対象となったものは、人間の行動における遺伝と環境の相対的対影響において他にありません。哲学者から親の立場にあるもののほとんどが「もって生まれたもの」または「学習により得たもの」の、どちらが強いのかということ推察してきました。これは、インコ・オウムの行動についても同様です。コンパニオンとして最大限の可能性を得るには、どういう選択をすべきかに影響してきます。

関連した研究

推測だけでなく心理学や教育の分野の研究では、精神、社会性、情緒の行動3領域すべての発達において、環境が非常に重要な役割を果たすことがはっきりとしてきました。1950年代の実験では、両親またはその他から子育ての世話を受けることなく成長した赤ちゃん猿が、異常なほど長時間ある一点をボーッと見つめて時間をすごしたり、ストレスに直面すると、自分の体を不自然な形で抱きしめ前後に揺れを繰り返すという行動がみられました。悲しいことに、1980年後半にはルーマニアの孤児院で、生後1年ほどきちんとした世話を受けることなく育った子供達にも同じ行動のパターンがみられたのです。しかし、神経科学の分野からの最新の発見ほど驚くべき、そして決定的なものはないでしょう。

特に脳科学における最近の技術の進歩により、科学者達は脳細胞の電氣的（神経）活動が物理学的に脳の構造を変えることを発見しました。何がこういった神経活動を起こすのでしょうか？経験なのです。人間の子供は、実際に持つべき神経細胞（ニューロン）すべてをもって生まれますが、脳は最初の1年に、実際に使うことになる何億倍ものシナプスを作り出します。しかし、驚くべきことに早期の感覚的経験により刺激を受けなかったシナプスは不要とみなされ捨てられてしまうのです。幼い頃の環境刺激を経験するほど、多くのシナプスが残ることになります。その後、残ったシナプスがニューロン間で結びつき、それぞれの脳内でつながりを作り独自のパターンができあがるわけです。

この研究により、刺激と子育てのケアを受けない環境にいた子供は、外から見られる行動だけでなく、脳内の物理的な構造まで影響を受けるということがわかりました。こういった一連の研究が、猫やネズミやショウジョウバエにいたるまで、他の種の動物でも広く行われました。それでも、いまだにこの「氏か育ちか」となると、答えよりも疑問のほうが多くでてきます。こういった研究結果については慎重になるべきです。なぜなら、脳内シナ

プスの数と特定の行動との正確な関係性に関しては未知の部分が多いためです。ただし、注意深くあっても、さまざまな分野において以下のことが推奨されています。

- 1) 学習は生物学的ニーズである
- 2) 若年期の経験は質・量ともに、将来の学習能力と社会的および感情的行動に影響をおよぼす

コンパニオンであるインコ・オウムについて

新生児期のインコ・オウムの脳に特化した研究はされていないと思いますが、前述の研究結果があてはまると考えるのが妥当です。上記2つの推奨される事柄に関して、コンパニオンとして暮らすインコ・オウムには当てはまらないという特別な根拠はありません。科学的なデータおよび素晴らしいコンパニオンに育てあげた多くの人々の経験にもとづくと、生まれてまもないインコ・オウムも似かよった学習に対する生物学的ニーズを持ち、幼い頃の環境刺激や子育てのケアの欠如が良くない影響を与えることも考えられます。

結論として、ペットのインコ・オウムへの早期からの社会化には注目すべきとなるわけです。社会化というのは、インコ・オウムの主な伴侶となる人間の生活環境下で、人間と上手に生きていく事を教える過程です。早期社会化は、鳥の子供を巣箱から取り出した瞬間から始まり、その後も、形を変えながら鳥の生涯に渡って続けるものです。早期社会化の目的は、以下の2つを教えることです。1) コンパニオンとして必要な行動。2) 鳥の快適、健康、幸福を約束するための行動。優れた早期社会化というのは、この2つの項目に重なる部分を可能な限り増やし、生活に必要とされるものが鳥の幸せにもなるようにすることです。

早い時期からつつけるような色鮮やかな吊り下げおもちゃや、つまみあげられるような床に置くおもちゃを用意しましょう。世界をいろいろな角度からみせるため、おもちゃはさまざまな場所に移動してください。他の鳥達との交流、水遊び、上り下り、色形食感の異なる食べ物、音楽、滑る床、平らな床、見知らぬ人に会う、掃除機の音、羽ばたく、箱から覗く、ひもに逆さづりになる、バスケットに入る、でんぐり返し、人間の吐息や温かい手、子供のくすくす笑い等々社会化メニューは数え切れないほどあります。

早期社会化は、幼鳥達に豊富な経験をさせ、それぞれに最適な時間とペースを考慮し、しっかりした目的のもとに行うので、集中した労力を必要とします。これを実施するには、個々の鳥が自然と持っている学習ニーズを満たしながらコンパニオンとしての能力を最大

限にする指導者が必要です。しかし、その結果、鳥達は、生活のあらゆる側面において、より信頼でき、自信をもち独立心のある、好奇心旺盛で柔軟性を持った存在になります

バードミル（鳥生産工場）クライシス

科学のコミュニティで経験と行動の関係性について、こういった大きな進歩がみられると、これまで懐疑的だった人々にも安心材料となります。バードミルで繁殖し育て、非人道的といわないまでも不適切に扱っている人々を説得するには、さらにどのくらいの研究が必要なのでしょう。

小鳥を“生産”している人々は、典型的で特別な信念を持っています。生産工場で小鳥生産にはげむ人々（バードミラー）にとって、鳥は、商品・グッズ・製品と同じように販売するものなのです。結果、ガーデニング用品や歯磨き粉と同列で、鳥のビジネスを考えています。コンパニオンとなるべきインコ・オウムに人道的で豊かな環境での子育てをするという考えが、利益追求という動機と相反してしまうものであれば受け入れられません。刺激のない子育て環境としては、ふさわしくない中で幼鳥を生産します。結局はそれがコスト効率がよいというだけのためなのです。余分な費用は使わないわけです。実際、望ましい形で巣離れし社会性も備えた幼鳥を育てるとなると、大きな利益を生み出しません。それでも、適切に育てる必要があると思っている人から鳥は入手すべきです。

バードミル・ブリーダーの特徴は、“完璧なペット用オウム・インコ”を選択的に繁殖しようとしていることです。たしかに責任を持って動物飼育を行うことは、コンパニオン・バードの良い繁殖と関係があります。しかし、バードミラーが排除する「特徴」は、必ずしも良くない遺伝子の結果ではありません。それらは、刺激の少ない環境や社会化および適切な子育てケアの欠如による学習された行動です。残念なことに、静かなタイハクオウム、感受性の低いヨウム、動かないコンゴウインコなども選択的繁殖の可能性として入っていますが、こういった非インコ・オウム化の過程で、何が失われるのか想像が付きません。大事なものは、選択的繁殖が、バードミルで生み出される問題行動への、受け入れられるべき解決法ではないということです。

幼鳥の入手先を選ぶ時に避けるべきバードミルの見極め方トップ10のリストです。このうちひとつでも当てはまるものがあつたら、他を探しましょう。

- 1) 繁殖する親鳥達が人工孵化のための卵生産機のように扱われている
- 2) 幼鳥達が、食餌の時間以外、積み重ねられた小さな保育容器やケージに閉じ込められたままになっている

- 3) 幼鳥達が、興味深いおもちゃやその他の刺激もない空っぽのケージにいれられている
- 4) 幼鳥達が、ヒトや他の子たちとの接触がない孤立した子育て部屋の中にいる
- 5) 時間節約のため、幼鳥達の食事時間が、できるだけ短時間ですまされ、回数も頻繁ではない。強制給餌。
- 6) 幼鳥達が、ヒトやその他の幼鳥と、上手にかかわることを学ぶ時間や探索する時間が、ほとんど、またはまったく与えられていない。
- 7) 幼鳥達が、まだ非常に幼い、または一人餌にならないうちに、経験のない飼い主に適切な飼育場所、種類、個体について質問することもなく販売してしまう。
- 8) 飼い主に、飼育書や手引きなどの情報が、ほとんどまたはまったく与えられない。
- 9) 販売後のケアがない。
- 10) ブリーダーが、完璧なペットとなる遺伝的操作の話ばかりする。

幼鳥の育成環境を良い方向へ

バードミル批判を明確にするとしても、そこで育った鳥達の存在を否定してはいけません。インコ・オウムを、まだコンパニオンとして育てる・選ぶ・生活するといった一連の事に関する情報がなかった頃に、そういった施設から鳥を迎えた人達のためのサポートを私達はすべきです。ときには、情報がないことよりも有害となる間違った情報の流布というのが、ありがたいことに最近では改善されてきました。インコ・オウムの多様性や知性を考えると、私達は多かれ少なかれ「今知っていることを当時から知っていたら」と思うものです。過去に育った鳥達をあきらめるのではなく、鳥達とその飼い主の将来を良い方向に導くことは可能です。

バードミルで育ったにも関わらず素晴らしいコンパニオンになった鳥もいます。これは、同種の中の個体差であると同様に、異種間の違いによる部分でもあります。どちらにしても、インコ・オウムの気質、子育てをした家族、そして否定できない幸運のおかげでしょう。

社会化不足により起こると思われる不健全な行動、不十分な体の機能、一人遊びができない、幅の狭い不健康な食の好み、過度な恐怖心、突発的な攻撃性、慢性の噛み癖、絶え間ない叫び声などで、多くの鳥達は苦しんでいます。こういった行動を消し去ることは難しいですが、非常に難しい問題でさえ程度を軽くする事は可能です。今は、多くの優れた行動コンサルタントがいますし、インターネットやメーリングリストもあります。また、クリックートレーニングといった革新的な方法や書物も手に入るでしょう。

社会化の過程を通じて鳥達が得るものも大きいですが、やはりベストなのは、知識を持った経験豊富なブリーダーによる早期社会化による、さまざまな問題の予防です。伴侶として人間と生涯暮らす鳥を育てるための事ですが、これは買う側が負うべき責任ではありません。

解決のために

幼鳥の育成方法についての本当の意思決定者は、バードミラーでも責任感と知識を持つブリーダーでもありません。商業の世界ではお決まりですが、究極の力を持つのは消費者です。我々が購入する限り、鳥達は、必要な刺激や社会化の機会がない環境で育てられます。代わりにもっと認識を高め、コンパニオン性を最大限に引き出すため、現在わかっている範囲の脳と行動の発達に準じて育てられた幼鳥を入手しましょう。

私達は今、神経科学や関連する研究が、環境、脳の仕組み、行動が影響しあっているという、かつてなかった情報が手に入る心理学の新しい夜明けの瞬間にいます。これまでにわかった生まれつきの物と学習による物に関する事だけでも、良い伴侶となるインコ・オウムを育てる最適な方法を選ぶのに十分な根拠となります。科学的証拠と長年に渡る優秀なブリーダーの経験が一緒になる事で、幸せな伴侶となる鳥を育てる鍵は早期社会化である事を証明してくれます。これは、飼い主のためなのはもちろんですが、鳥達の幸せのためにはさらに大切な事です。

筆者略歴

S.G.フリードマン Ph.D ユタ州立大学心理学部教員。親と子の関係の研究について 25 年以上のキャリアがあり、応用行動分析学と行動研究法のコースを教えている。プロとしてのバックグラウンドと生涯を通じての動物に対する愛情から、生活伴侶としてのインコ・オウムに関する書物の執筆も始めた。子供達に高い効果のあるものと同じ手法が、環境になじみやすい飼い鳥の育成に役立つ事がわかった。すべての関わり合いを持つ時間が教える機会であり、適切な行動を伝えるためのものである—決して強制はしない。

ボビー・ブリンカー **For the Love of Greys** という広く知られた本の著者であり、10 年以上に渡ってエキゾチックバードを育てている。ヨウムへの思い入れにより、優しく強制する事のない形を基礎とした管理の理論を確立した。コンパニオンとしての生活環境を高める鍵は、飼い主への教育だと信じ、インコ・オウムの飼い主教育に尽力している。

www.ParrotTalk.com というサイトの運営や複数のメーリングリストの管理人をつとめ、さまざまな種のインコ・オウムのディスカッション・フォーラムも設けている。彼女の執筆した記事は国内外で広く読まれている。